

青森の鱒ヶ沢プリンスホテルが外資グループに買収され名前も変り併設のゴルフ場に弊社のゴルフ場基幹システムが採用された。白神山地のブナの原木林を訪ねてみよう。平成二十年十月二日の協力会のコンペに参加した。

茨城から弘前までは車で約六時間、朝七時に出たので、お昼前には盛岡に着いた。びよんびよん舎で冷麺を食べ、盛岡インターの近くにある盛岡市先人記念館に入る。新渡戸稲造と米内光政、金田一京助の遺品などが展示されていた。非常時に総理大臣を務めた米内は山本五十六や最後の大将と言われた井上成美と共に海軍三羽カラスと称され三国同盟に反対し日米戦争回避に尽力し、終戦の年に再び海軍大臣となり終戦に導いた人物であった。一方、近衛内閣で海軍大臣となった及川古志郎は陸軍の圧力に屈して三国同盟を締結してしまったと汚名を着せられている。それはかつての部下であった井上が「及川は結論だけを書いてある漢文ばかりを読んでいたので思考回路がなく、流されて三国同盟に同意してしまった。それを知った山本が血相を変えて詰め寄ると「勘弁してくれ」と年下の山本に謝ったが戦争で犠牲になった三百五十万人に対しては勘弁出来ない」と話しているからである。

「敗軍の将、兵を語らず」と言うが、戦後、三浦半島で赤貧の生活を送りながら死んでいった井上の言葉のみが真実なのであろうか。石油の八割をアメリカからの輸入に依存していた当時の日本、その日本への石油輸出禁止令は日本全体のあせりとなっていた、さらにヒットラーの奇策「独ソ不可侵条約締結」により日米開戦は回避が出来ない情勢になってしまっていたのではないだろうか。その流れは誰にも止められないものになっていた。

そして伏見宮を軍令部総長に頂いていた海軍はひそかに大和や武蔵を建造し、開戦の準備を進めていた。空母でなく戦艦であったところに古い成功体験の影が見える。

バルチック艦隊を破った秋山真之にはアメリカの仮想敵国となった日本を覆う暗雲が見えた。しかし、大国ロシアに完勝した日本では「勝って兜の緒を締めよ」と言った秋山の言葉が曲解されてしまう。彼の死は日本にとって大きかったかも知れない。

同じように及川古志郎には戦後が見えていたのかも知れない。いや、敗戦が決定的となった昭和十九年に軍令部総長であった及川は敗戦後の日本について責任をもたねばならない立場であった。当然、資源もなく領土も小さくなる日本をどのようにして復興させるのか考え続けていたに違いない。DNAを解析するゲノムのように漢文の古典の中にその答えは用意されていたのではないだろうか。そして発見し実行した。

私はその結果を五十年後にしばしば見る機会に遭遇していた。結婚式場の明治記念館や市ヶ谷の駅前のホテルなどでしばしばその会合は開かれ、私は父親をその場所に送迎していた。そこでソニーの盛田会長を紹介してもらったこともあり、日産自動車の社長だったと言う人などにも会った。海軍の帽子を被っている人、少しお酒が入って青年のように紅潮した顔色の人などが集い旧制高校の同窓会のような雰囲気だった。正面の看板には「海軍浜名海兵団同窓会」と書いてあった。約二千人の理科系の学生を温存させる意味で浜松に集めておけたのは海軍の人事権をもつ及川総長だったはずである。だから、海軍兵学校の図書館で忠節について質問した青年を思い出しその教官にしたのではないだろうか。

昭和十七年五月、井上成美を司令官とする日本海軍の空母艦隊と米海軍の空母艦隊は初めての空母同士の決戦をニューギニア東方の珊瑚海で行った。

この戦いは「戦術面では日本の勝利、戦略面ではアメリカの勝利」と言われている。しかし、実態は暗号を解読されていた日本軍はことごとく裏をかかれた。この戦いを日本の大勝利としてしまった事により、日本軍に油断や慢心が生じ、暗号がもれたまま山本五十六が司令官となって戦った六月のミッドウェー海戦で大敗してしまう。

油断や慢心だけがあの海戦の敗因ではない。物事を深く見つめいろいろな角度から見てみなければ過ちの原因はつかめない。先人館の展示を見ると改めて新渡戸稲造の果たした役割が大きかった事、そして、それすらも打ち消してしまった日本に対するアメリカの警戒心の強さをいやと言うほど感じた。

十月の津軽平野は赤いリンゴが鈴なりで自然の恵みに満ち溢れているように見える。しかし現実には十一月後半には雪が降りゴルフ場もクローズされてしまう。そして長い冬が訪れ雪の中の生活が始まる。北に行くほど人がやさしい、棟方志功の仏さまのように人が赤く暖かに見えるのは森や雪が多いからなのかも知れない。

鱒ヶ沢から日本海沿いを走り、深浦の千畳敷の奇岩をみながら帰途についた。途中、白神岳の懐にある十二湖周辺を散策する。白神山地の豊かな自然は原木林として守られていた。青森県と秋田県にまたがる広大なブナの原生林は一万七千ヘクタールそのまわりを五万ヘクタールの山が囲んでいるそうである。大自然は無限の小宇宙を内臓しながら幾重にもつらなる。その腐葉土のフワフワとした足取りのように生命が奥深くまでも躍動しているのが感じられた。山道を歩きながら、ゴルフの虫にとりつかれ、そこから逃れられないでいる自分をおかしく思った。自然の前ではゴルフもビジネスも戦争すらさえも一瞬の夢をみている事のように思えてしまう。

白神山地のブナの古木と盛岡の先人記念館に展示されていた多くの人材が重なって見える。新渡戸稲造から宮沢賢治までの盛岡ルネッサンスはこの森の風が吹き込んで雨となり雪となって彼等を育てたのかも知れない。(二十年十月記)